

2026年度
入 学 試 験 問 題
(A 日 程)

国 語

注 意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/6から6/6まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答欄に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アイデンティティということばがある。「じぶんがじぶんである根拠」とか「自己同一性」、さらには「独自性」などとも訳されることばだ。先にも登場した^①レインという精神科医は、アイデンティティをつぎのように定義している。

〈アイデンティティ〉とは、それによって、この時この場所でも、過去でも未来でも、自分が同一人物だと感じるところのものである。それは、それによって、ひとがそのひとと認められるところのものである。私の見るところでは、多くの人々は、自分たちが、揺りかごから墓場まで、^x同一の持続的存在であると考えるとするケイコウがある。しかも、このような〈アイデンティティ〉は、それが空想であればあるほど、一層^x後生大事に取って置かれるのである。（「自己と他者」、志貴春彦・笠原嘉訳）

たとえばひとだれかの子どもとして生まれ、園児になり、生徒になり、会社員になり、父になる……。これら「ひと」をつくりあげているものは、そういう役柄や属性それじたいをとれば、どれ一つそのひとに固有のものはない。これらはわたしが他者を定義づけ、他者がわたしを定義づけるとき、材料一式ではあっても、かといってこれらの総計が「わたし」なのでもない。わたしが「わたし」になるのは、むしろそれら役柄や属性の断片をつぎあわせて、じぶんというもののイメージを組み立てるなかである。これをレインは、「一貫して同じ仕方で自分自身をみること」とも表現している。そしてつぎのように言いきる。「自己のアイデンティティとは、自分が何者であるかを、自己に語って聞かせる説話である」と。

このように考えると、先にみた「カジョウな合理主義」や「接触回避」などの現象も、じぶんというストーリーを紡ぎだす一つのメソッドだったということになる。他人との関係のなかでじぶんの意味づけが十分に配給されないので、あるいはじぶんと他人がたがいその意味づけを無効にしあうようなぎくしゃくした関係しか結べていないので、じぶんひとりで明確な物語（レインは「空想のシナリオ」と呼ぶ）を紡ぎだすしかなかったのだ。不自然なまでにリンカクのはつきりした（という）ことはユウズウのきかない物語を、である。

そのためにはしかし、じぶんをさまざまに語りだす、そういう柔らかさがなければならぬ。人生とは、ある意味では、こうした「じぶんに語って聞かせる説話」が自他のあいだでたがいに無効化しあう不協和のなかにあつて何度も何度も破綻する過程であり、またそれをたえず別のしかたで物語りなおすべく試みる過程であるといつてもよい。一つの物語しかなければ、それがくずればじぶんも修復不可能になってしまう。

（中略）

人生といえはすぐ、まっすぐな線のように思い浮かべるくせから離れる必要がある。人生のある時期までは無垢で、ある時期から汚れだすというのはうそである。ある時期までは幸福で、ある時期から不幸になるというのもうそである。だいいち、毎日がぜんぶ幸福、ぜんぶ不幸などというのは、きつとたいくつでやりきれないだろう。

勤勉というのはたしかに美德の一つではある。多くのひとが「ワーカホリック」（仕事中毒）といわれるまでに勤勉にはたらく。が、そのモチヴェーションについては、**A** 自己解釈を加えないほうがいい。たとえば、満ちたりた将来のためにいまできるだけがんばっておこうという論理、これは未来の幸福のために現在をとてつもなく貧しくする論理である。そのような論理にしたがつて生きるひとたちは、老いれば老いたで、今日じぶんがあるのは……と過去をふりかえるのだろう。つまり過去の努力の延長線上にいまのじぶんを設定するのだろう。いつてみれば、じぶんを過去の「実績」から逃げられなくするのだ。

でもどうして、わたしたちはいつも同じ線の上になくてはいけないのだろう。同一のシナリオの枠内にいなければならないのだろう。同一の存在でいなければならないというこの強迫観念が、わたしたちをしばしばひどい不安に駆りたてる。

不安。それはつねに、未来を思い描く想像力と切り離しがたく存在する。たとえば、若いひとが老いということを思い描くとき、不安という気分よりもむしろ唾棄したい気分なのだろう。たとえばじぶんより二、三歳上のひとを「おばさん」と呼ぶ。高校生が大学生を、中学生が高校生を、である。じぶんが二、三年でその歳になるその年齢のひとを「おばさん」と呼び棄てるのである。これはすぐやってくるじぶんの未来に絶望しているし以外のなものでもない。そのアグレッシヴな口調にもかかわらず、暗い現在だ。そこでは、なにかになりたいというそのイメージを欠いたまま、いまのじぶんから抜けだすこと、別のじぶんになることを希望するしかない。

では、満ちたりた老いらくというのは、明るい現在だろうか。右でみたように、老いの充実というのは、多くの場合、過去の栄光の記憶にのっかっている。あのときががんばっておいたから、いまこうしていられる……。「幸福な老年」とは、いままでのじぶんの業績に満足している状態である。つまり、過去の記憶とそこから生じた財によっかかって生きることである。ということは、別の生きかたというものをあらかじめ封じ込める生きかたのことである。それはすでに確定した過去の延長線上でなりたつ現在であり、したがってこの充実した老いは**B** 限定された狭い世界に入っていく。変化すること、存在がめくれることをみずからに禁じるような生きかたである。

これまたもう一つの貧しさではないか。ファッションというのが、記憶を断つて、たえず一から、いやゼロからやりなおすこと、社会から与えられたアイデンティティの衣を脱いで**C** アイデンティティのステージを変えていくような生きかた、つねにときめいた生きかたというものを意味するとすれば、こうした満ちたりた老いこそ、ファッションのときめきからはもつとも遠い生活だと言わねばなるまい。

^⑦隠居という慣習がリタイアするというよりもむしろアイデンティティの別のステージへの乗り換えを意味したように、つまり隠居とはなにもしなくなるということではなく、別のことを開始することだったように、あるいは改名の慣習というものがひとには生涯複数のアイデンティティがあつて当然だとみなす社会のそれであつたように、アイデンティティが単一である、という固定観念こそが、この生活はくずれるのではないか、つまりは「わたし」がこわれるのではないかといった不安を煽ることになっているのではないか。

知人たちとのある集いでこの話をする、伊能忠敬は隠居してから日本地図を作った、と教えてくれたひとがいた。あるいは別の友人は、「ピカソはだれよりもうまくピカソをまねることができる」というピカソじしんのことばを教えてくれた。ピカソはポウダイな数の作品をのこしたから、なかにはじぶんで描いたかどうかかわからない作品もある。市場にどんな贋作が生まれるので、ある画商が本人を選んでもらうことにした。ピカソは贋作を選びはじめたのだが、そのうち本物をも贋作として選びはじめた。そこで画商が、「あなたが描くところを見てましたから、それはちがうでしょう」と言う、と、ピカソは先のようなことばを返したというのである。つまり、これはかつてのピカソが描いたんだろうがおれは認めない、というわけだ。

^⑩じぶんはだれか。それをすぐに内部に、つまりじぶんのなかで持続する同一性に求める習慣から一度じぶんをへだてる必要があるしうだ。すぐあとで述べるように、わたしたちの「だれ」はむしろ、他人との関係のなかで配給される。この関係が、わたしたちにアイデンティティのステージ、それも複数のステージを設定してくれるということ、そこに視線を戻す必要がある。

*無垢……心身の汚れていないこと、純真であること。
*強迫観念……考えまいとしても絶えず心を占有して頭から離れない不快、不安な考え。（そうせずにはいられないという強い思い込み。）
*唾棄……つばを吐き棄てるように、捨てて顧みないこと。忌み嫌い軽蔑すること。

問一 ――線部1～5のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〜〜線部X「後生大事に」、Y「不協和」の本文での意味として適当なものを次のA～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

X 後生大事に		Y 不協和	
X	A	Y	A
	イ		他者を無条件に受け入れる状態
	ウ		感情が静まり安定している状態
	エ		自分の考えを完全に固めた状態
オ		オ	
すべての物を大切に		物語が調和して一体化する状態	

問三 ――線部①「レイン」という精神科医は、アイデンティティをつぎのように定義している」とありますが、レインが定義するアイデンティティとはどのようなものですか。最も適当なものを次のA～オから選び、記号で答えなさい。

A 生まれつきの性格や気質がずっと変わらず続くことで、どんな時でも同じ自分だと考えられる自分のイメージのこと。
イ さまざまな経験や役割のかけらを自分でつなぎ合わせ、終始同じ方法で語りながらつくっていく自分のイメージのこと。
ウ 成長する中で与えられる、社会の中での役割や立場を積み重ねた結果として自然に形づくられる自分のイメージのこと。
エ 周囲の人の期待や社会のきまりに合わせて行動を決定し、人との関係の中で少しずつ形づくられる自分のイメージのこと。
オ 環境によって定義づけられた理想の人物像を目指して、期待に応えようとしながらつくっていく自分のイメージのこと。

問四 ――線部②「揺りかごから墓場まで」と同じ意味として使われていることばを漢字二字で書きなさい。

問五 ――線部③「二つの物語しかなければ、それがくずればじぶんも修復不可能になってしまう」とありますが、これはどのようなことを言っているのですか。最も適当なものを次のA～オから選び、記号で答えなさい。

A 物語が現実の状況や他者との関係と合わなくなった時に、別の語り方へと組み替える柔軟性がなければ、自己像を保てなくなること。
イ 物語が現実の立場や他者からの定義づけと合わなくなった時に、新しく物語を作る創造性がなければ、自己像を保てなくなること。
ウ 物語が他者からの評価を気にしなくなった時に、異なる視点を取り入れて調整する柔軟性がなければ、自己像を保てなくなること。
エ 物語が他者との損得による関係で決まるようになった時に、新たな関係性を構築する創造性がなければ、自己像を保てなくなること。
オ 物語が他者との関係で生じる矛盾や対立を整理できなくなった時に、関係を修復する柔軟性がなければ、自己像を保てなくなること。

問六 A C にあてはまることばとして適当なものを次のA～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。（同じ記号は二度使えません。）

A ますます イ ゆめゆめ ウ がちがちの エ つぎつぎと オ こつこつと

問七 ――線部④「満ちたりた将来のために……貧しくする論理」とありますが、これを次のように言い換えました。（ ）に当てはまることばを考えて十五字以内で答えなさい。（句読点、記号も字数に含めます。）

将来幸せて満足できる生活を送るために、（ ）論理。

問八 ――線部⑤「たとえばじぶんより二、三歳上のひとを『おばさん』と呼ぶ」とありますが、若者がこのように発言する理由を次のようにまとめました。（Ⅰ）・（Ⅱ）に当てはまることばをそれぞれ指定された字数で本文から探し、書き抜きなさい。（句読点、記号も字数に含めます。）

少し年上の人を貶める行為には、近い将来やつてくる（Ⅰ 九字）している気持ちが表れており、そのことで（Ⅱ 十七字）を描けないまま現在を暗く生きているから。

問九 ――線部⑥「満ちたりた老い」とありますが、これによって発生すると考えられる問題として最も適当なものを次のA～オから選び、記号で答えなさい。

A 過去の経験を生活の基準にしているため、経験していないことには対応することができないという問題。
イ 過去の成功を生活の基準にしているため、すでに確定した生き方から外れることができないという問題。
ウ 過去の失敗を生活の基準にしているため、失敗を意識しすぎて実力を発揮することができないという問題。
エ 過去の努力を生活の基準にしているため、新しい価値観を身に付けることができないという問題。
オ 過去の栄光を生活の基準にしているため、時代の変化に追いつくことができないという問題。

問十 ――線部⑦「隠居という慣習」の具体例として最も適当なものを次のA～オから選び、記号で答えなさい。

A 会社を辞めて、家で何もせずただ寝て過ごすようになった。
イ 宝くじが高額当選したので、予定よりも早く退職した。
ウ 流行が終わった服をすべて処分して、新しい服を買った。
エ SNSを始めて、新しい自分を見つけることができた。
オ 現役を引退したので、若手の育成に携わるようになった。

問十一 ――線部⑧「伊能忠敬」と同じ時代に活躍した人物として適当なものを次のA～オから一つ選び、記号で答えなさい。

A 鴨長明 イ 紫式部 ウ 松尾芭蕉 エ 夏目漱石 オ 樋口一葉

問十二 ――線部⑨「そのうち本物をも贋作として選びはじめた」とありますが、ピカソがこのような行動をとったのはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 関心が弱まった過去の作品は、自作でも価値判断がいまいになり本物を見極める姿勢が十分でなくなっていたため。
- イ 現在の自分の感覚を基準としたスタイルに合わない作品は、たとえ自作だったとしても本物と認めようとしなかったため。
- ウ 市場に回る精度が高まった贋作は、過去の自作との違いが分かりにくくなり本物を誤って贋作と判断してしまったため。
- エ 画商の依頼に疑問を抱いたピカソは、相手の反応を確かめるため意図的に本物を贋作と答える行動をとるようになったため。

オ 自作かどうか確信できなかった作品は、本物と間違えてしまうより贋作と間違えたほうが都合がいいと判断したため。

問十三 ――線部⑩「じぶんはだれか」とありますが、この問いに答えるために必要なことは何であると筆者は考えていますか。解答欄に合うように五十字以内で説明しなさい。（句読点、記号も字数に含めます。）

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

明良はだるい身体を起こして立ち上がると、のろのろと玄関に向かった。

開け放たれた玄関から、気持ちのいい風がはいってくるのを感じると同時に、^{*}真野の姿を見つける。真野は玄関に置いてある、兄ちゃんが漬けている梅ジュースのボトルをしやがんでのぞきこんでいた。

「真野」

明良が声をかけると、^①真野はゆっくりと立ち上がって、さわやかな笑顔を見せた。

「どうしたの？ 今日」

「べつに、どうもしないよ」

明良は玄関のたたきに座って、寝ぐせだらけの頭をもしゃもしゃとかいた。

「もう、オレ、バスケやめると思うから、キャプテンたのむよ」

「なんで……？」

真野が心配そうな声をだす。

「オレの二三のときの作文、インターハイとか医者になるっていうの、忘れてよ。もう、そういう目標、今は持っていないから」

「どうしたんだよ、なんかあったの？」

やさしい真野のことだ。簡単にあきらめないだろうことは予測がついた。だから明良は大きくため息をつく、覚悟を決めた。ちゃんと真野があきらめなくなるような真実を話そうと思った。

「ハクジョウするけど、^{*}吉田がキレたあのととき、オレ、キャプテンとして小杉と話したわけじゃないんだ」

もうバスケもキャプテンもやめるのだ。本当のことを知られたってかまわない。

「オレ、コーチにひいきされて、小杉とコンビプレイさせてもらって、本当はよろこんでたんだよ。だからあのととき、これからもコンビを強化させようって、ふたりでこっそり自主トレしようって、誘ったんだよ。まあ……きっぱりと断られたけどね」

だけど、真野はちっともおどろかずにならずいた。

^②「小杉がきてよろこんでいたのは、わかってたよ」

明良は言葉を失った。

「ほかのヤツらも気づいてたと思う」

そんな失敗は、したつもりがなかった。

「だって、おまえ、小杉がきてから、スゲー生き生きと練習してたもん」

みんなのグチに積極的に参加したし、コーチを揶揄したり、小杉をつき放そうとしてきた。浮かれる気持ちはすっかりかくしてきたはずなのに……。

「あんな後藤を見るの、新入生のころ以来だったよ」

明良は大きく息を吐きながら、頭を抱えた。自分にあきれて言葉もでない。

「だから、小杉の捻挫がウソだったのがわかったとき、あんなに怒ってたんだろ？」

完全に、見透かされている。

「ねえ、バスケ続けなよ。お父さんの跡を継がなくても、後藤はバスケを続けたほうがいいよ」

それでもなお、真野は嫌味のない明るい声でいった。

「おまえ、オレをゆるせるわけ」

「ゆるすものにも、後藤は初めから悪いことなんてなにもしてないじゃん」

一生懸命に、明良をフォローしているその姿は、まるでテレビドラマの熱血教師みたいだった。

「バスケを本気でやりたかったら、小杉みたいなチームメイトができて舞い上がるのは当然だし、コーチにひいきされたら、うれしに決まってる。それでも、オレたちにあわせてくれてたじゃん」

「でも、裏切ってた」

明良は真野の情熱に水をさすつもりでいった。

「でも、チームを見限らないでいてくれた」

真野も、負けない。

「あのさあ」

明良は大きく息を吐いた。

「小杉にしても、オレにしても、どうしてそこまでひきとめようとするわけ？」

すると、真野は今までのさわやかな笑顔を少しくもらせていった。

「……恩がある」

急に目をふせて、いいにくそうに続ける。

「うちのチームには、恩があるんだ」

(中略)

「オレ、中学受験失敗して、まだふてくされてた時期だったし、こんな弱小チームでやってられるかって、すぐに見限ったんだ」
そんな理由でやめていくのも、めずらしいことじゃない。

「だけど、ほかにはいりたい部活もなかったし、とりあえず幽霊部員のままでいたんだ」^③

真野は背中をまるめてぼそぼそと話し続けていた。

「だけど、毎日退屈でさ。居場所はないし、やりたいことはないしで、スゲーきつかったよ」

そのころを思いだしているのか、首を倒してうなだれている。

「そんなときにさ。後藤が声をかけてくれたんだよ」

「オレ？」

また身に覚えのないことをいわれて、明良はすっとんきような声をあげた。

「スゲー無邪気な笑顔を見せて『今日、練習来ないの？』ってさ」

明良は必死で自分の記憶の回路をさぐったけれど、まったく思いだせない。

「返事に困って口ごもってたら『最近一年でもゲーム形式の練習に参加させてくれるんだよ。面白いからきたほうがいいよ』って誘ってくれてさ」

「……覚えてない」

明良の言葉に真野は「やっぱりね」と笑った。

「でも、オレは声をかけてもらえたのが、スゲーうれしくてさ」

真野は照れているのをかくすように、両手で顔をこすって汗をふいている。

「それで何気ない顔して、体育館にいったらさ。まず、吉田や谷口がオレのこと見て『おかえり！』っていつてくれたよ」

明良はそんな真野をじっと見つめた。

「久野が『さびしかったわよ』って、抱きついてくれて、和田が『大丈夫、オレたち全然上達してないから』って、肩組んできたよ」^{*}

指先でおでこをぼりぼりとかいて、照れまくっているその様子は、さわやかで、やさしくて、おおらかないつもの真野らしくなかった。

「そして、おまえは夢中になって練習してたよ。スゲー楽しそうに、ボールを追っていたよ」

新人生のころ……。

シュート以外の練習ができるのが楽しくて、パスを受けとるだけで、ドリブルでコートをかけぬけるだけで、爽快だった。愉快だった。興奮していた。

それで将来、プロの選手になりたいという夢を抱くようになったのだ。NBAで活躍するような選手になるのだと、心に誓ったのだ。

「なんか、ここ、いいじゃんって思ったよ。いいヤツらが集まってるじゃんってさ」^④

弱小チームのくせにはりきって練習する明良のことを笑うヤツはひとりもいなかった。三年生の引退試合のときは、親切な先輩が「やってみるか？」と試合に出場させてくれたほどだった。そんなひいきは、弱小だから、試合に勝つつもりなんかないチームだからこそ、可能だったのだ。そんな明良を、メンバーはひがむことなく応援してくれた。

「ここにいたいって思ったよ」

そんなチームに、不満を持つようになったのはいつからだろう。^⑤

「ここを自分の居場所にするんだって、この居心地のよさを自分が守っていかうって思ったよ」

このチームに失望するようになったのは……。

「男子バスケット部は、いいチームだよ」

初めて出場したその試合でボロ負けして、早々と試合会場を去らなければならなかったあのときだ。むなしかった。くやしかった。もっと試合がしたかった。でも、負けたらそれでおしまい。もう試合はさせてもらえない。

バスケット部を楽しみたかったら、勝たなきゃ意味がないと思った。それなのに、うちのチームはこんなに簡単に負けてしまう。しかも負けたことをちっともくやしがつていない。

メンバーと自分の意識のギャップに、愕然^{がくぜん}とした。中学時代をこんなのにきな部活ですごして、今、すでに地区大会で優勝するようなヤツらに、追いつけるのだろうか、不安になった。

急に心配になったあのときから、チームに不満を持ちはじめた。このノリにそまるわけにいかないと思った。そして、おばあちゃんの家でのシュート練習にくわえて、夜のトレーニングをはじめた。勝つチームにいるヤツらに少しでも追いつくように。^{*}里中高に入学したときにはすでに手遅れでし
たということになっていないように。

「男子バスケット部は弱いけど、いいヤツらが集まってる」

だけど、バスケット部を楽しいと思わせてくれたのは、ほかでもないこのチームだったからだ。

夢中になっている明良のことを、だれもバカにしなかった。なにがなんぼっちゃってんの的な邪魔は一度もされたことがない。だから、練習にこないヤツに「面白いよ」と声をかけてしまうほど、無邪気でいられた。のびのびとボールを追いかけていられた。

たとえば小杉みたいに、チームメイトとうまいってなかったら、どうだっただろう。はたして、バスケット部を楽しいと思えただろうか。プロになりた
いと思えるほど、夢中になれただろうか。

「だからこれ以上、貴重なメンバーを失いたくない。小杉だってちゃんときてるし、後藤にもやめてほしくない」

真野はそういうと、立ち上がった。

^⑦「待ってるから」

ふり向いて、明良を見る目は、真剣そのものだった。

だけど、明良は返事ができなかった。帰っていく真野を、ただだまって見送ることしかできなかった。^⑧

＊真野・吉田・谷口・久野・和田……明良と同じ中学校の男子バスケットボール部員。真野はサブキャプテン。
＊小杉……明良と同じ中学校の男子バスケットボール部員。優れた技術を持っているがチームになじめておらず、怪我をしたと嘘をついて練習で手を抜いていた。
＊里中高……里中高等学校。明良が入学を希望しており、男子バスケットボール部は全国レベルである。

問一——線部①「真野はゆつくりと立ち上がって、さわやかな笑顔を見せた」とありますが、真野がこのような笑顔を見せた理由として考えられるものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア なかなか出てこない明良に対する不満を押し隠し、作り笑いでごまかそうとしたから。
イ 練習を休んだ明良を前に気持ちを落ち着かせて、普段通りの雰囲気で接しようとしたから。
ウ あまりにも普段と違う姿の明良に動揺したが、気づかれないように冷静を保とうとしたから。
エ 玄関にある梅ジュースに気をとられていたが、明良が来たので気持ちを切り替えようとしたから。
オ 練習に來ない明良を責めてしまわないように、気持ちを落ち着かせようと思ったから。

問二——線部②「小杉がきてよろこんでいたのは、わかってたよ」とありますが、これを聞いたときの明良の気持ちとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 本心を理解してくれていたことを喜び、これ以上説明することはないと思っている。
イ 浮かれる気持ちを隠せていなかったことに落胆し、弁解は不可能だと諦めている。
ウ 隠していた真実が実はすでに見抜かれていたことに驚き、戸惑いを感じている。
エ 部員の心情を把握できていることに感心し、キャプテンにふさわしいと思っている。
オ 見当違いの会話を続けてくる真野に苛立ち、気持ちが伝わらないことに失望している。

問三——線部③「幽霊部員のままでいた」とありますが、これはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 中学受験に失敗して落ち込みチームの弱さにも失望していたが、別に興味のある部活がなかったから。
イ 中学受験の失敗から勉強を優先したい気持ちが強かったが、バスケットボールは好きだったから。
ウ どこにも居場所がないので仕方なく入部したが、チームが弱い上誰とも仲良くなかったから。
エ ゲーム形式の練習は好きだったが、勉強を優先したいと考え部活への参加を控えていたから。
オ チームの雰囲気合わず退部届を出そうとしたが、チームメイトに強く引き止められたから。

問四——線部④「なんか、ここ、いいじゃんって思ったよ」とありますが、真野がこのように思った理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 様々な練習メニューを気持ちよく行うことができ、将来プロ選手を目指せる環境が整っているから。
イ 引退試合でも試合に出させてくれる先輩や、心の底から応援してくれる仲間がいると感じたから。
ウ プロを目指すほどの技術を持った選手でも、楽しく練習できる雰囲気であることに胸を打たれたから。
エ 弱小チームだと見下していた真野を責めず、真剣に練習する仲間の態度に心を動かされたから。
オ バスケを純粋に楽しみ、久しぶりに顔を出した真野を当然のように受け入れる仲間の空気に触れたから。

問五——線部⑤「不満を持つようになったのはいつからだろう」とありますが、明良自身はいつごろ不満を持ったと考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 練習内容が単調で技術的な向上を感じられず、自分の成長につながらないと判断したことで部活への意欲が徐々に薄れていったとき。
イ 初めて出場した試合で実力が発揮できず、これ以上このチームでは上手になることができないのではないかと不安になったとき。
ウ チームメイトとの人間関係がうまくいかず、小杉のように孤立感を覚えるようになったことで部活に対する信頼が揺らいでいったとき。
エ 初めて出場した試合に大差で敗北した際、明良だけが強い悔しさを感じていることに気づき仲間との意識の違いに衝撃を受けたとき。
オ コーチの指導方針が大きく変わり、勝利至上主義の空気が強まっていく中で部活本来の楽しさが失われていくことに疑問を感じたとき。

問六——線部⑥「すでに手遅れでしたということ」とありますが、これを次のように説明しました。()に当てはまることばを考えて二十字以内で答えなさい。(句読点、記号も字数に含めます。)

里中高校のバスケットボール部に入ったとき、()ということ。

問七——線部⑦「待ってるから」とありますが、この言葉に込められた気持ちを説明したものととして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 何とか部に戻そうという熱意を持った強い言葉に、明良への怒りの気持ちが込められており、次々と退部していく今のチームの現状に対する焦りが感じられるものになっている。
イ 明良が戻る可能性は低いと感じつつわずかな望みをかけた言葉に、諦めと期待が入り混じる複雑な気持ちが込められており、真野の置かれた立場が感じられるものになっている。
ウ 明良に残ってほしいという強い願いをまっすぐ伝えた言葉に、仲間を思う純粋な気持ちが込められており、今のこのチームへの深い愛着が感じられるものになっている。

エ 仲間の明良に対する熱い思いを代弁した言葉に、サブキャプテンとして責任を果たそうという気持ちが込められており、明良に有無を言わせない凄み(すさまじさ)が感じられるものになっている。

オ 明良の葛藤を理解しながら彼が戻ると信じてかけた言葉に、相手の決断を尊重しようとする気持ちが込められており、明良への強い信頼が感じられるものになっている。

問八 ――線部⑧「ただだまって見送ることしかできなかった」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 真野が一方的に引き止める態度に嫌気がさし、何を言っても自分の思いをわかってくれそうもなかったから。
- イ 真野が置かれた立場は理解しており、この場で退部したいという本心をはっきり伝えるのは申し訳なかったから。
- ウ 真野の話からこれ以上部員が減ると試合ができなくなるといふチーム事情を察し、もう一度考え直したかったから。
- エ 真野の思いは伝わったが部に戻ることへのためらいが消えず、返す言葉が見つからなかったから。
- オ 真野のやる気に反してすでにバスケットボールへの熱意がなく、何も言う気持ちになれなかったから。

問九 〜〜線部「……恩、がある」について生徒A～Cが話し合っています。(a)・(b)に当てはまることばをそれぞれ指定された字数で本文から探して書き抜き、(c)は最も適当なものをあとの選択肢ア～オから選び、記号で答えなさい。

(句読点、記号も字数に含めます。)

生徒A 真野が明良を執拗に引き止めるのは、この「恩」が関係しているみたいだね。

生徒B 言いくそうにしているのは、昔の自分を思い出したくないからかな。

生徒C 話の中で、明良に「(a 十字以内)」と自然な口調で声をかけられたことが嬉しかったみたいだよ。

生徒A さらに他の仲間にも声をかけてもらって、自然と部に溶け込めたみたいだね。

生徒B 真野にとって男子バスケット部は(b 五字以内)になっていくんだ。

生徒C つまり、(c) 引き止めようとしたんだね。

ア 明良に個人的に助けられた経験があり、そのことをずっと感謝しているから

イ 引退試合に出させてくれた先輩に感謝し、その気持ちを忘れずに行動しているから

ウ 夢中になって練習する明良の姿が忘れられず、辞めるのはもったいないと思っているから

エ 明良と一緒に練習する楽しさを知っており、これからも一緒に練習したいと思っているから

オ チームに支えられた経験があり、仲間や部活動に対して強い感謝の気持ちを持っているから

1	ケイコウ
2	カジョウ
3	リンカク
4	ユウズウ
5	ボウダイ

傾向

過剰

輪郭

融通

膨大

問二

X
ア

Y

エ

問三

イ

問四

人

生

別…生涯・一生 など

問五

ア

問六

A

ウ

B

ア

C

エ

問七

現	在	の	生	活	を	犠	牲	に	し
よ	う	と	す	る	別.. 現在苦しい生活を送ろうとする				

問八

I
じ
ぶ
ん
の
未
来
に
絶
望

II

う	な
そ	に
の	か
イ	に
メ	な
ー	り
ジ	た
	い
	と
	い

問九

イ

問十

オ

問十一

ウ

問十二

イ

問十三

内	面	に	あ	る	固	定	的	な	同
一	性	だ	け	を	基	準	に	せ	ず
、	他	者	と	の	関	係	の	な	か
で	立	ち	あ	が	る	複	数	の	自
己	像	に	目	を	向	け	る		という(こと)。

二

問一

イ

問二

ウ

問三

ア

問四

オ

問五

エ

問六

実	力	差	が	あ	り	す	ぎ	て	試
合	に	出	ら	れ	な	い			

別…力の差がありすぎて練習についていけない など

問七

ウ

問八

エ

問九

a
今
日
、
練
習
来
な
い
の
？

b

居
場
所

c

オ

受 験 番 号